

症例経過 30歳女性で左膝痛を主訴に近医を受診し、左脛骨近位骨腫瘍、病的骨折の診断で紹介となった。レントゲンで直径約5cm 関節面に接する骨透亮像があり辺縁は明瞭であった。MRIでT1で低信号、T2で内部に不明瞭な高信号を伴った低信号、Gd造影で増強効果を認めた。針生検で軟骨芽細胞腫の診断となり腫瘍搔爬、人工骨移植を行った。術後1年5ヶ月で左膝痛が出現しレントゲンで骨透亮像が再度見られたため切開生検を行い、軟骨芽細胞腫の再発もしくは悪性病変疑いで腫瘍広範切除、人工膝関節術を行った。初回手術から1年11ヶ月後に胸部CTで肺転移がみられたため骨肉腫に準じた化学療法を行った。肺病変の急な増大なく肺部分切除を行った。

病理組織学的に初回手術時に軟骨芽細胞腫と骨肉腫で鑑別を要し、軟骨芽細胞腫と診断した(埼玉標本1)が、肺転移が生じたため骨肉腫と考えていた。

その後、ヒストンH3.3 G34W 免疫染色を行ったところ、陽性であり(埼玉標本2)、軟骨へ分化を示す骨巨細胞腫として昨年この会で報告した(埼玉標本3.4,5)。

その際に、肺転移が骨巨細胞腫の悪性転化かどうかの問題となり、肺生検がすすめられた。昨年10月に施行された肺生検検体(埼玉標本6.7)を提示し、この点を中心に議論したい。